

認知症の方とその家族が安心して地域で繋がるために ～リレーポイントとしての診断後支援の取り組み～

中司 みずほ ●高知大学 医学部附属病院 高知県基幹型認知症疾患医療センター
池田 由美 ●高知県 若年性認知症相談窓口 若年性認知症支援コーディネーター



認知症の本人、家族、地域住民が共に学ぶ認知症サポーター養成講座

要旨

認知症の診断後の方、およびその家族と地域が繋がるリレーポイントとして2つの取り組みを実施した。1つは院内で診断後の方と家族を対象とした認知症サロンの開催、2つ目は地域へ向けた講座の開催である。

認知症サロンには外来を受診した方を中心に26名が参加した。スタッフが診断後の本人、家族に関わり、その不安を受け止め、地域包括支援センター等地域の相談窓口へ繋ぐ取り組みを行った。また、地域と認知症の方、およびその家族が繋がる場として、認知症サポーター養成講座と市民公開講座を開催した。両講座の事後アンケート調査から、参加者は「認知症について理解を深めたい」と考えていることがわかった。

地域医療貢献のポイント

認知症の方とその家族が安心して生活するためには、地域全体で正しく認知症を理解することが重要である。特に認知症の方、家族、地域住民が共に「新しい認知症観」の理解を深める場づくりは、認知症の方が希望を持って生活する一助となる。

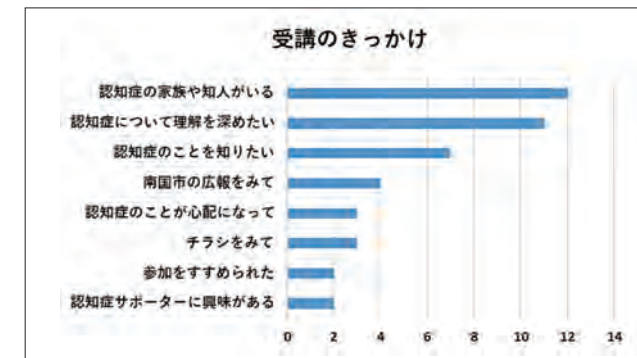
1.目的と方法

認知症の診断を受けた後、本人とその家族が地域との繋がりを絶ってしまうケースが多い。そこで、認知症の診断を受けた方とその家族が安心して地域と繋がることができるリレーポイントになる支援が必要と考え、2つの取り組みを実施した。1つは院内にて認知症サロンの開催、2つ目は地域へ向けた講演会・講座の開催である。

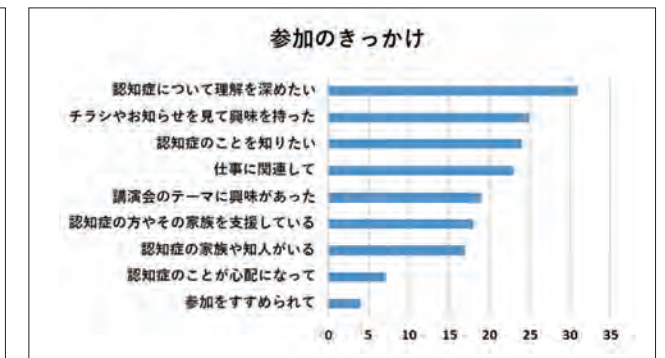
2.現状の成果・考察

サロンは「認知症ちょこっとサロン」の名称で月に一度、認知症専門外来がある月曜午後に院内の図書コーナーで開催した。途中、コロナ等感染症の対策で中断した時期があり、計5回の開催となった。参加人数は延べ26名(認知症の本人11名、家族9名、地域包括支援センター等の専門職4名、ボランティア2名)だった。対象は主として外来を受診される方とした。参加した診断後の方が、やりたいことを続けて生活している認知症の方の例をスタッフから聞いて、緊張していた表情がほころび、渡したリーフレットを大切に持ち帰ることがあった。診断後の本人が抱える不安に寄り添い、希望を失わないよう支援することの重要性を実感する出来事だった。複数が同席する時には本人同士、家族同士が話をできるよう場づくりをし、自然とピアサポートの形になった。また診断後すぐの方や地域へ繋がっていない方には、その場で地域包括支援センターへ繋ぐなど、認知症サロンはリレーポイントとして一定の成果があったと思う。

認知症サポーター養成講座事後アンケート



市民公開講座事後アンケート



認知症ちょこっとサロンの様子



サロン入口の看板

地域へ向けては、まず9月に認知症サポーター養成講座を開催し、認知症の方および家族も含めて24名が参加した。事後のアンケート結果では「認知症の家族や知人がある」「認知症について理解を深めたい」が上位となっており、寄せられた感想では「(認知症は)怖いイメージや誤解も多くあると思います。周りの理解の大切さを感じました」というものがあった。こうしたニーズを踏まえ、3月の市民公開講座では三豊市立西香川病院の大塚智丈医師を迎え、「新しい認知症観」をテーマに講演会を主催し、80名が参



市民公開講座のポスター

加した。事後のアンケート結果では参加のきっかけとして、認知症サポーター養成講座の時と同様「認知症について理解を深めたい」が上位となっていた。講演会終了後には認知症の本人、家族・支援者で分かれて座談会を開催し、感想や今後の希望、それぞれの抱える思いについて意見交換し、支え合いの場となった。

3.今後の展望

本取り組みを経て明らかになった課題の一つが、認知症施策推進基本計画で示された「新しい認知症観」の啓発である。疾患の正しい理解と未来のイメージ形成が疾患の受容を促し、認知症の本人、家族、ひいては社会の認知症観が変わる糸口になると考える。それにより認知症の診断前後に抱える不安を和らげ、地域での安心した暮らしに繋げたい。



参加者が熱心に聴講する、市民公開講座の様子

